



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



持続可能な未来を創るために

—— 不平等的な社会を考える

SDGs (Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標)

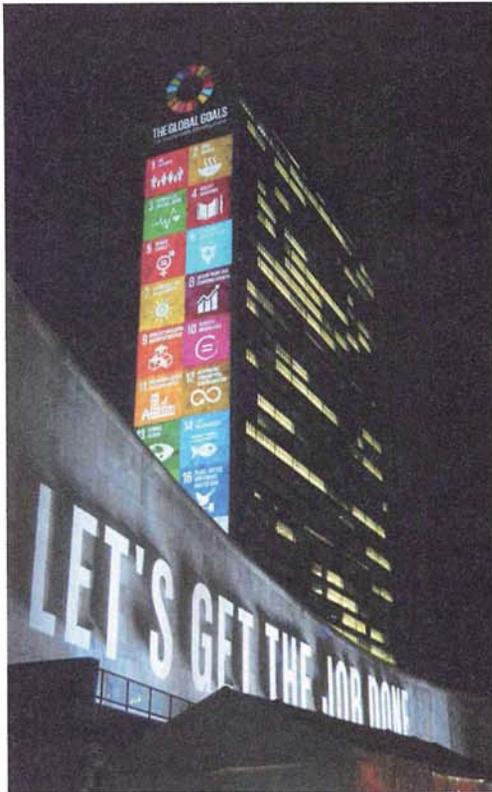
2030年までの達成を目指す17の目標

- 目標1 貧困をなくそう
- 目標2 飢餓をゼロに
- 目標3 すべての人に健康と福祉を
- 目標4 質の高い教育をみんなに
- 目標5 ジェンダー平等を実現しよう
- 目標6 安全な水とトイレを世界中に
- 目標7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 目標8 働きがいも経済成長も
- 目標9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 目標10 人や国の不平等をなくそう
- 目標11 住み続けられるまちづくりを
- 目標12 つくる責任 つかう責任
- 目標13 気候変動に具体的な対策を
- 目標14 海の豊かさを守ろう
- 目標15 陸の豊かさを守ろう
- 目標16 平和と公正をすべての人に
- 目標17 パートナリシップで目標を達成しよう

目標

● 持続可能な社会の実現に向けて課題を共有し、行動する。





持続可能な開発目標（SDGs）が照射された
ニューヨークの国連本部ビル

「持続可能な未来」という言葉から、あなたはどのようなイメージをもちますか。

SDGsは、二〇一五年に国際連合で採択された、日本を含めた全ての国の共通目標です。「誰一人として取り残さない」をキーワードに、全ての人が、それぞれの立場から目標達成のために行動することが求められています。

5

17の目標は、人間（目標1〜6）・豊かさ（目標7〜11）・地球（目標12〜15）・平和（目標16）、パートナーシップ（目標17）の五つの要素のいずれか一つ以上に相互に関連しています。

中学校での学びを通じて「よりよい未来を創るために、どのように社会・世界と関わっていけばよいのか」について、一緒に考えていきましょう。



私たちが生きている現代は、人や物、情報や資本がつかつてないほどのスピードをもって国境を越える「グローバル化の時代」といわれています。

また、未来はこうなるであろうという予測がつきにくい「不確実性の時代」と呼ぶ人もいます。今世紀になる頃から未曾有の自然災害や気候変動、難民問題、格差社会など、環境・経済・社会分野での危機が絶え間なく訪れていることを考えると、確かに納得できる表現かもしれません。このような時代にことさらに大切なのは「ともに生きること」を学ぶ」と「人間として生きること」を学ぶ」である、とユネスコは説いています。

ここでは「ともに生きる」「人間として生きる」という意味について一緒に考えていきましょう。中には自分と異なる意見もあるかもしれませんが。多様な価値観を受け止めながら、「自分だったらどうするのか」について少しずつ考えを深めていきましょう。

心のバリアフリー

あらゆる人が平等に社会参加できる社会や環境について考え、そのために必要な行動を続けることが「心のバリアフリー」です。二〇一八年に策定された（第四次）障害者基本計画では、「障害」を心身の機能の障害のみによるものではなく、社会におけるさまざまな障壁（バリア）によって生じるものと捉える考え方が買われています。

- ① 障害のある人への社会的障壁を取り除くのは社会の責務であるという「障害の社会モデル」を理解すること。
- ② 障害のある人（及びその家族）への差別（不当な差別的取扱い及び合理的配慮の不提供）を行わないよう徹底すること。
- ③ 自分とは異なる条件を持つ多様な他者と「コミュニケーション」を取る力を養い、すべての人が抱える困難や痛みを想像し共感する力を培うこと。

始めの「問い」

あなたの身のまわりには、どんな「バリア」がありますか。思いつくものを三つあげてみましょう。

15

10

5



どう思いますか
——新聞投書から言葉を考える

(最初の投稿) ◎ 「障害」に違和感、こう呼んでは？

(訪問介護員 59)

視覚障害者の方の外出をサポートするガイドヘルパーの仕事について3年目。以前は気にかけることもなかった「障害者」という言葉に違和感を覚え、今もずっと、適切な言葉を探している。「障(さわり)」「害」。意味にも響きにも愛がないように思える。多数派に便利ないように構築された社会で、今ある五感を最大限に活用し、目的を達成していく彼ら。利便性に慣れて感覚が鈍くなった自分に比べ、むしろ自由であるとさえ感じる。

例えば、「要支援者」という呼び方はどうだろう。彼らを「支えている」と思いきや、実は「支えられている」。そんな優しい世の中になっていきそうな予感がしませんか。

◎ つながり感じられる「要支援者」

(中学校教員 58)

投稿者の意見に賛成です。学校現場でも昔、通常学級と切り離して学習を行っていた「特殊学級」が、個別の生徒の実情に合わせて学習支援を行う「特別支援学級」に変わりました。同様に「障害者」も「要支援者」に変えれば、障害のない人とのつながりが感じられ、優しい感じがします。

特に、障害のある方が自分のことを話すときに「私は〇〇障害者です」と言うよりも、「〇〇要支援者です」と言った方が抵抗なく言えるのではないのでしょうか。またそれを聞いた人は、どこかでこの人をサポートしてきたらという気持ちになるのでは？

併せて、「肢体不自由者」についても「運動要支援者」に、「発達障害者」は「行動要支援者」や「学習要支援者」という呼び方にするというのはいかがでしょうか。

◎「支援」を共生共存社会の礎に

(団体職員 55)

バリアフリー化が進む昨今、街中でハードウェアの面でも思いも寄らないような気遣いを垣間見ることがある。一方、それに対する障害者の方々の思いはわかりかねるし、自身ができる気遣いを考えると、極めて心もとない。ふだん接することがない障害者の方々の思いをはかりかね、支援を躊躇したり、二の足を踏んだりしてしまうのだ。障害者を「差別」する気持ちはないが、必要な支援をあれこれと思い巡らせる、なかなか行動には移せない弱さがある。

幸い「ヘルプマーク」が少しずつ浸透しつつある。ヘルプ（＝支援）という言葉をとrendにするためにも、「障害者」を「要支援者」と呼ぶのに何ら問題はない。むしろ「ヘルプマーク」と「要支援者」が連動し、健常者と障害者の間に横たわる心理的ハードルを乗り越え、共生共存社会の礎となることを願う。

◎障害は人格と無縁、違和感ない

(無職 74)

私は半世紀以上「障害者」と生活していますが、違和感はありません。障害のある人は可哀想、支援しないと暮らせないのでとの発想なら、この言葉を問題にし嫌う感情が生まれるでしょう。

例えば、食事の時に卓上の調味料が自分のそばにあり、相手が届かない場合、誰だつて取つてあげますよね。そんな感じで、いたつて普通に暮らしています。

ヘレン・ケラーの言葉に「障害は不便です、しかし不幸ではありません」というのがあります。「障害」という言葉を避けていません。

「障害」は状態であり人格とは無縁だと私は思います。「要支援者」という呼び方を提案されていますが、支援を必要としない障害者もたくさんいます。調味料を渡すように、ちよつとした手助けと理解があれば十分であり、ましてや呼び名の変更は不要ではないでしょう。

◎障害者も他人を支援しています

(無職 51)

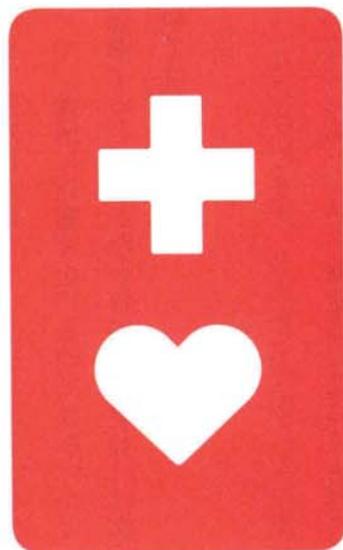
「障害者」は、単に障害（ハンディキャップ）を持つ人を示す単語だと思う。それを文字に分解して解釈するから違和感を覚えるのでは。「障がい」の表記は私には自己満足に思えて好きではない。

「要支援者」？ いや、障害者でも、自分が可能なことなら人に支援をする人間はいくらでもいる。勝手に決めつけられても困る。私は1級1種身体障害者手帳を持っているが、観光客に道を教えるなどの支援は日常的にしている。

自分自身を含め、至近の人間に障害を持つ者がいないと、感じられず、理解できないことも多い。単純に言葉の問題だけじゃないと私は思う。

障害者という単語に悪意や偏見^{へんけん}を一切交えない考えを皆が持ち、またそうなるよう教育も行うことが必要ではないか。新しい単語を作って定着させるのと、どちらが良からるか。

《出典》二〇一八年九月五日付の新聞によった。



ヘルプマーク

※ヘルプマークとは、外見からはわからなくても、援助や配慮を必要としているかたがたが、周囲のかたに配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくなるように作成されたマークです。

次の「問い」

それぞれの意見に対して、あなたはどのように思いましたか。自分の考えを、周りの人と話し合ってみましょう。



「ここに」にいる」を言う意味

ロバート キャンベル

困った時に声を上げるか、上げないか。複雑な要素をふくむこともあり、人としてすべき、すべきでないはその時の状況による。当事者でもない者が必ずしも口を挟めるわけではない。

数年前にテレビ番組の取材で、私は国内のある社会福祉団体を訪問した。売れ残って捨てられそうになった食品等を、所得の低い人々に提供するのが事業の中心だ。活動拠点てんにしている建物を訪ねると当事者は居おらず、職員が送り出す食糧しょくりょうの荷造りを黙々とやっているだけだった。

代表者に話を聞くと、送り先の一人ひとりとはとても助

かっていると。だが、団体名が入った車での配達や、個別訪問は困る事情があるらしく、物を送る際に差出人名を印刷した箱は使わなくて、宅配便で配達してほしいという要望があるらしい。活動周知も、役所の窓口チラシを置いてもらう他に術すべはなく、一対一で助けを必要とする人にはつながりにくいという現実があるとっておられた。

アメリカでも、同じ名前の団体が、ほぼ同質の活動を展開している。しかし食糧をもらいに、毎週周囲に住む低所得者が続々と集い、交流の空間として盛り上がっている。明るく真剣に、互いの苦境に向き合っている。

「ここに」にいるよ、と声を上げる勇氣。言うのは簡単だけれど、声を上げることで子どもが受けるかもしれないイジメや、親戚に迷惑めいわくをかけるのではないかというストレスを想像すると、なかなか日本の当事者には求められないと現場では納得した。

「ここに」にいるよ」と声を上げることの難しさについて、わたくしのいっそう身近なところでも似たことが起きた。

数年前、LGBTの人々に対して支援するに値しないという発言をめぐって広く批判が起こった。わたくしも、LGBTの存在を覆い隠し続けることで、個々の人々と社会の多様な接点を希薄にさせ、文化や経済など、未来に向かう大きな活力となることをそがせてしまうのはもったいないと反論した。その中で当事者の一人と告げたことが報道され、メディアで増幅し、元来そのことが主眼ではなかったが、性的少数者であることを公表することで、多くのことに気づく経験になった。

以前から知り合った人に加えて、インターネットを通じて「ここにいる」と言えず、また言っても聞き入れてもらえないという人から複数の声を寄せられた。

職場で同性パートナーのいることが言えず、だんだん居づらくなり転職を繰り返す人。長く連れ添った相手と一緒にローンを組みマンションを購入しようとしたが、他人同士ゆえ銀行に断られてしまった人。緊急入院で手術を受けようとしたが、パートナーが法的な家族でないために身元保証人にはなれないと言われて困った人。

中には切実な問題で、LGBTの人権を守る条例や法整備を待ってられないものもあり、読みながら展望が見えず暗い気持ちに陥った。

貧困同様、日本では性的少数者を公表することに関して「勇気を出して」、とはとても言えない側面がある。言わなくてもいい社会に早くなればいいね、という人もいるが、その前にまず、現在「いる」を言うことの意味に、一人ひとりが思いを寄せることが大事ではないかなと、この頃考えるようになった。



ロバート キャンベル 「二九五七」
ニューヨークに生まれた。日本文学研究者。
著書に『よむつわ上・下』『日本古典と感
染症』などがある。

《出典》新聞掲載の文章をもとに、筆者が修正
したものである。



15 10 5

一〇〇年後のみなさんへ

緒方 貞子
おがた さだこ

一〇年、二〇年後はいざしらず、
一〇〇年後というのは、

想像を絶する遠い将来ですので、
グローバル化の結果、

そのときにまだ「国」が残っているのか、

「地域」が残っているのか、すらわかりませんが、

人間が生きている限りは、

いろんな試みを続けていくと思うのです。

その中で、日本も様々な形で、

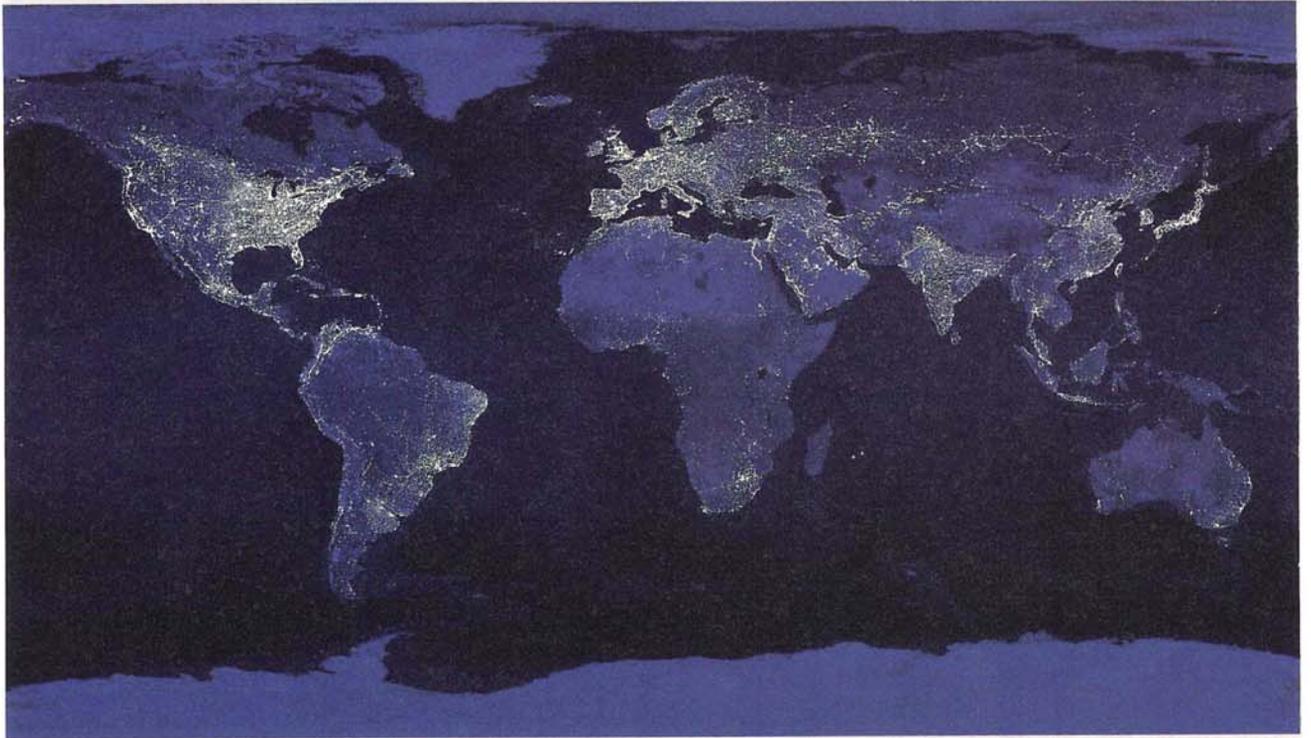
いい考え方、いい試み、多様な幸せの在り方を打ち出して、

他を引っ張っていきける

立派な人々と、

国であってほしいと思っております。

《出典》『共に生きるということ』によった。



最後の「問い」

なぜ人は人を助けるのでしょうか。